

村上春樹「32歳のデイトリップ」(第二回)

・佐野・楯谷・田中・奈原・大藤・本田・渡辺・安

○レポート締め切り 2024.7.13 (土)

○第三回読書会予定 2024.7.20 (土) (13:40~16:00)

【村上春樹全作品】版

32歳のデイトリップ 村上 春樹

123

僕は三十二で彼女は十八で……と考えると、どうしてもうんざりしてしまうことになる。

僕はまだ三十二で、彼女はもう十八……これでもいいのだ。(1)

我々はちょっとした友だちであって、それ以上でもないし、それ以下でもない。僕には妻がいて、彼女にはボーイ・フレンドが六人もいる。彼女はウィークデイに六人のボーイ・フレンドとデートをし、月に一度だけ日曜日に僕とデートをする。それ以外の日曜日には彼女は家でテレビを見る。テレビを見ている時の彼女はせいうちのよう(2)に可愛い。

彼女が生まれたのは一九六三年で、その年にはケネディー大統領が撃ち殺された。そしてその年に僕ははじめた女の子をデートに誘った。流行っていた曲はクリフ・リチャードの「サマー・ホリデイ」だった。

まあそんなことはどうでもいい。

とにかくそんな年に彼女は生まれた。

そんな年に生まれた女の子とデートをすることになろうなんて、その頃にはもちろん思いもよらなかった。今だってどうも不思議な気がする。月の裏側まで行って煙草でもふかしているような気分だ。

若い女の子って退屈だよ、というのがまわりにいる人々のおおまかな統一見解である。話だって合わないし、反応だって月並みだしさ、と彼らは言う。にもかかわらず連中だってよく若い女の子とデートをする。それでは彼らはやっと退屈ではない若い女の子を捜し出したのだろうか？ いや、そんなわけではない。要するに彼女たちの退屈さが彼らをひきつけるのである。彼らは退屈の水をバケツいっぱい頭から浴びながら、相手の女の子にはしづく一滴かけないというややこしいゲームをごく純粹に楽しんでいるのである。

少なくとも僕にはそのように思える。

事実、若い女の子たちの十人中九人までは退屈な代物である。しかしもちろん、彼女たちはそんなことにぜんぜん気づいてはいない。彼女たちは若く、美しく、そして好奇心にみちている。退屈さなんて自分たちとは無縁の存在だと彼女たちは考えている。(3)

やれやれ。

僕はなにも若い女の子たちを責めているわけではないし、また嫌っているわけでもない。それどころか、僕は

彼女たちが好きだ。彼女たちは僕に、僕が退屈な青年であつた頃のことを思い出させてくれる。これはなんというか、とても素晴らしいことである。僕らだってその昔はどうしようもなく、美しいくらい月並みで、退屈だったのだ。(3)

「ねえ、もう一度十八に戻りたいって思う？」と彼女が僕に訊ねる。

「いや」と僕は答える。「戻りたくなんかないな。たとえ幾ら金を積まれても、もう一度十八になんかなりたくないね。」

彼女は僕の答がうまく理解できないようだった。

「戻りたくないって……本当に？」

「もちろん」125

「どうして？」

「今のままでいいからさ」

彼女はテーブルに頬杖をついて考えこみ、考えこみながらコーヒー・カップの中でスプーンをかちやかちやとまわした。「そういうのってなんか信じられないな」

「信じた方がいいよ」

「でも若い方が素敵じゃない」

「たぶんね」

「じゃあどうして今の方がいいの？」

「一度で十分だからさ」

「私はまだ十分じゃないな」

「だって君はまだ十八なもの」

「ふうん」と彼女は言う。そして君はもう十八なんだから、と僕は自分に向かってそつと言いつける。(4)

僕はウエイトレスをつかまえて二本めのビールを頼んだ。外は雨で、窓からは横浜港が見えた。

「ねえ、十八の頃って何を考えてた？」

「女の子と寝ること」

「その他には？」

「それだけ」

彼女はクスクスと笑ってからコーヒーをひとくち飲んだ。

「で、うまくいった？」

「うまくいったのもあるし、うまくいかなかったこともある。もちろんうまくいかない方が多かったけど」126

「何人くらいの女の子と寝た？」

「数えてないよ」

「本当？」

「数えたくないんだ」

「私が男だったらきつと数えちゃうな。だって楽しいじゃない」

(行開け)

もう一度十八というのも悪くないな、と思える時だつてある。しかし十八に戻ってまず最初に何をしようかと考えてみると、僕にはもう何ひとつ思いつけないのだ。僕はもし十八に戻ったとしても、何をすればいいか思いつけないのだ。

あるいは僕はもう一度十八になって、三十二歳の魅力的な女性とデートをすることになるかもしれない。これ

なら悪くない。

「もう一度十八に戻りたいと思ったことはありませんか？」と僕は彼女に訊ねる。

「そうねえ」と彼女はにっこり笑って少し考えるふりをする。「ないわ。たぶんね」

「本当は？」

「うん」

「よくわからないな」と僕は言う。「若いというのは素晴らしいことだってみんな言いますよ」

「そうよ、素晴らしいことよ」

「じゃあなぜ戻りたくないんですか？」

「あなたも年を取ればわかるわよ」**[127]**

でもやはり僕は三十二で、一週間もランニングをなまけるとおなかの肉が目立ってくるという状況に置かれている。もう十八には戻れない。これはあたりまえのことだ。

朝のランニングをすませると野菜ジュースを一缶飲み、椅子にごろんと横になり、ビートルズの「デイトリップパー」をかける。

「デー—イ・エイ・トリッパー」

あの曲を聴いていると、列車のシートに腰かけているような気分になる。電柱やら駅やらトンネルやら鉄橋やら牛やら馬やら煙突やらガラクタやらが、どんどん後に過ぎ去っていく。どこまでいったって、たいして変わりばえのしない景色だ。昔はすいぶん素敵な景色みたいに思えたものだけだ。

隣りの席に座る相手だけが時折変わる。その時僕の隣りに座っていたのは十八の女の子だった。僕は窓際に、彼女は通路側に座っていた。

「席をかわってあげようか」と僕は言う。

「ありがとう」と彼女は言う。「親切なのね」

親切なわけじゃないんだ、と僕は苦笑する。君よりはずっと退屈さに慣れているというだけのことなんだよ。ただそれだけのことなんだ。**(5)**

電柱を数えるのにも飽きた

三十二歳の

デイトリップパー。

[128]

これは作り損ねの俳句

1981／8／20

〈語注〉

・デイトリップパー (Day Tripper) 1965年12月発売のビートルズの楽曲。曲名は、「日帰り旅行者」を意味する英語であると同時に、「ドラッグでトリップする人」という意味も持っている。レノンが「デイトリップパー」というのは、日帰り旅行者のこと。フェリーとかで旅をする人間の事々。つまり：週末のヒッピーとどうこと。わかるかい？」と語り、マッカートニーも「略」この曲は日帰り旅行者、日曜画家、サンデードライバーという感じで、雑多な題材を寄せ集めたお遊びソングだった」と語っている。

〈書誌〉

- ◎ 初出「トレフル」1981年11月号
- ◎ 初版「カンガルー日和」(1983年9月 平凡社所収)
- ◎ 「カンガルー日和」(1986年10月 講談社文庫)所収
- ◎ 『村上春樹全作品 1979～1989』(1991年1月講談社)所収

【討論の柱】人間にとっての加齢の問題

◎ 18歳が32歳になる(＝加齢)とはどういふことか？

○ 「僕はまだ三十二で、彼女はもう十八に近づいて

① 「僕はまだ三十二で、彼女はもう十八」これどいつの**だ。**」**[123]**

④ 「ねえ、もう一度十八に戻りたいって思う？」と彼女が僕に訊ねる。／「いや」と僕は答える。「戻りたくない。たとえ幾ら金を積まれても、もう一度十八になんかなりたくないね」(略)／「でも若い方が素敵じゃない」／「たぶんね」／「じゃあどうして今の方がいいの？」／「一度で十分だからさ」／「私はまだ十分じゃないな」／「だって君は**まだ十八だもの**」／「ふうん」と彼女は言う。そして君は**もう十八なんだもの**、と僕は自分に向かっ**てさう**と言っ**添える**。**[124]**～**[125]**

▼これは一般的には「僕はもう三十二で、彼女は**まだ十八**」となるはずのところだが、僕は「もつ」と「まだ」を逆転させる。これをどう解釈するか？

○「若くしては**「退屈」である**と**いふ**」**[126]**

② 「要するに彼女たちの退屈さが彼らをひきつけるのである。彼らは退屈の水をバケツいっぱい頭から浴びながら、相手の女の子には**し**ずく一滴かけないというややつこしいゲームをごく純粹に楽しんでるのである。少なくとも僕にはそのように思える。」

事実、若い女の子たちの**十人中九人**までは**退屈な代物**である。しかしもちろん、彼女たちはそんなことにぜんぜん気づいてはいない。彼女たちは若く美しく、そして好奇心にみちている。退屈さなんて自分たちとは無縁の存在だと彼女たちは考えている。**[124]**

③ 「彼女たちは僕に、**僕が退屈な青年であった頃の**」ことを**思い出させてくれる**。これはなんというか、とても**素晴らし**いことである。僕らだっ**て**その昔は**どうしようもなく美しいく**ら**い**月**並み**で、**退屈**だ**った**のだ。**[124]**

⑤ 「席をかわってあげようか」と僕は言う。「ありがどう」と彼女は言う。「親切なのね」親切なわけじゃないんだ、と僕は苦笑する。君よりは**ずっと退屈さに慣れている**というだけのことなんだよ。ただそれだけのことなんだ。**[127]**

▼僕は「18歳(若い)」を「退屈」と言うが、これは一般的な意味とずれている。現に彼女は自分を退屈と感じていない。僕のいう「退屈」のとはどういう意味か？

【第一回討論の記録】

佐野：僕はまだ三十二で、彼女はもう十八……これでもいいのだ。二人の歳の差の大きさにうんざりしている僕は「まだ」と「もう」をひっくり返すことで、歳の差の開きの大きさを気にしないで済むから、という程度に軽くとっていた。「退屈」、若さと老いの問題だろう。

安：18歳の恋人の会話は、一見何の意味も持たない、ありきたりな退屈な会話である。しかし、若い女の子はその退屈さを特別なものと考えている。本当に退屈なのは32歳の僕である。18歳という年齢より、32歳という年齢にどんな意味があるのか、わからない。

佐野：彼女には恋は新鮮で特別な事だが、32歳のおじさんにとってはありきたりのことだ。

村上：若い人は18歳であることを退屈と思わず、新鮮な特別なことだと思っているが、32歳の僕は18歳を退屈と思っている。18歳という年齢への思いに決定的なズレがある。このことが「僕はまだ三十二で、彼女はもう十八……これでもいいのだ」とどこかで関係してくると感じる。

佐野：「彼女たちは僕に、僕が退屈な青年であった頃のことを思い出させてくれる。これはなんというか、とても素晴らしいことである。」というが、このことどころが素晴らしいのか。退屈には慣れられるものか？ 退屈は本当はともしんどいことではないのか？ 僕はなれると言っているが、退屈さに目覚めることから人間は逃れられない。

奈原：今までで一番分りにくい小説だ。

【第二回討論の柱】

◎18歳の彼女には18歳は新鮮で特別な年齢と感じられ、32歳のおじさんにとっては退屈な年齢と感じられる。そのよびな認識のずれを語ることにどんな意味があるのか？

① 「JJJ」の「退屈」という言葉には何か特別な意味が込められているのか？

② 18歳と32歳という年齢にはそれぞれどんな意味が込められているのか？

【第二回討論の記録】

佐野・退屈＝同じことが繰り返されると「退屈」になる
18歳は退屈とは無縁と考えている年齢

32歳は退屈と考え始める年齢
楯谷・村上春樹「シャツ」

18歳は子供が大人になる年齢＝大人とみなされる年齢
32歳はお兄さんとおじさんだが、32歳はパパ活の年齢
油断したらおなかが出る、月一回のデート。

ダブルスタンダード＝僕はまだ三十二で、
彼女はもう十八……これでもいいのだ＝

・もう18＝まだ子供と思っていたらもう大人、子供扱い

・まだ32＝大人になった人が老化して死ぬまでの時間。
70代の人が死ぬには早すぎる、あまりに早い死

・親の立場から18歳の子供を楽しませるのは結構しんどい。自分の趣味を封印して、相手の年齢差を感じさせないように楽しませる

子供と一緒に遊び、子供を楽しませるのは喜びだが、自分を譲る必要がある＝気づかいをしながら楽しむ
相手を一段下に見ながら、自分をも楽しませる。

18歳の子供に合わせられる自分自身を楽しむ。
窓際の席を譲るのは、子供と旅するとそうなる、大人として子供への態度である。

大人から見たら、どっちでもいいことに子供はこだわる
＝そういうこだわりに自分を合わせることに自己肯定感
・大人になって、なお子供を内包している自分

・18歳になりたいかどうか子供に聞かれた時、戻りたいかどうか＝自分は戻りたくない＝大学入試受かる気がしない、ピンチをもう一度乗り越えられる気がしない
生存者バイアスかもしれないが

僕は子供の価値を見出しているが、一回性の価値である
32歳の僕の「退屈」は、何かに置き換えられるような感じ
でなく、揺らいでいる感じ

・親の目線か教師のような目線
今の自分が退屈に慣れている(自覚的)、当時の退屈な青年(当時無自覚)

退屈さ事態に価値がある＝僕の友達は退屈さを求めて会いに行く＝退屈さそのものに価値を見出す
強く退屈と思っていないのではないか？
かりそめの定形的な軽い退屈ではないか？

佐野・自分の過去の退屈さ＝

大人が子供に合わせる＝退屈であると同時に嬉しい＝二つをトータルに見ると退屈

話を合わせる退屈
話を併せられる肯定的

「退屈さ」そのものに魅力があるか？

退屈さには慣れられないのではないだろうか？

退屈＝無意味

これは僕の実際の体験ではなく、ビートルズの「デイ・トリップ」を聞いてそう思ったという話ではないか？

本田・私もそう思う

楯谷・想像上の思考実験としての、年上の女と年下の男の關係？

一回限りの18歳の素晴らしさ＝退屈と思いながら、女の子と遊びに行く男達

18歳の自分もいるし32歳の自分もいるし、両方持っている今の自分が良い。

大藤・今の自分は、18歳と32歳の真ん中
退屈している人にしか見えない

18歳＝何もかもが素晴らしい、32歳の退屈さに引き付

けられる18歳

32歳＝景色は変わっても変わっていないと見える

本当は変わり続けているのに、変わっていないように見える 視点の話

18歳の女の子からは新鮮に見える

32歳から見ると退屈

(＝32歳からはそれが新鮮に見える)

安 私の娘は16歳だが、その恋愛相手が年上のおじさんであるのは嫌だ。32歳と18歳の違いは現在の今と過去の今の違いで、歳への意味付けは、18歳が特別なものに対して32歳は普通ということ。ただ、それは人によって違う。18歳と32歳の関係は必ずしも男女の問題でない。18歳は「退屈」と同時に「若く好奇心に満ちた魅力的」な年齢。

語り手の僕はまだ32歳

女の子はもう18歳

人間にとっての今と昔、**現在と過去**

僕は若い女の子が退屈だと言う

自分が今の目線で過去を見ているからそう意味づける

今の自分の退屈を意識せず過去の自分にそれを投影する

本当は今の自分が退屈だから、18歳も退屈と思える。

過ぎた過去への**未練**を退屈と表現するのは、実は現在の

自分自身の無意識的領域における退屈の投影だ。

性別の問題ではなく、**年齢の問題**に見える

語り手は僕だが、女性作家がこんな風を書く時は同じ、

30 前後の若い人を見ると馬鹿馬鹿しいと思いつつ若い

っていいなあと思う(ばかばかしいと同時にかわいい)

本田・想像の世界だと思う

デイトリップパーの歌詞をメインに考える

魅力的な女の子に翻弄される男の歌

女の子＝デイトリップパー

新聞記者の前に現れるアン王女、マリー、

ラピュタのシータ、

30歳の男性にとつての空想のかわいい女

自宅でテレビを見ている姿を「せいうち」のように思う

のはなぜか。「せいうち」は画像検索ではあまりかわいく

ない悪意のある外見で、「とどろ」のほうがまだかわいい

頭の中で空想の会話をしている

「せいうち」のような女の子＝奥さん

楯谷・魅力的な女性＝男性の人生を変えてくれる女性

それが退屈であるのは何故か？

本田・退屈と言いながら、本当は魅力的と思っっている

佐野・32歳のデイトリップパーとは？

本田・女の子がデイトリップパー

僕にはそういう女の子がいないので、18歳の子を仮に見立てて、翻弄したいのではないか？

32歳の男が18歳の女の子を」

奈原・ケネディ家の女たらしの男達がこの小説の核心に触れる存在。43歳で大統領となったケネディ夫妻と37歳のマリリンモンローをめぐる三角関係。ジョンはキューバ危機でバランスオブパワーで危機を脱した大統領。「僕」は大企業の恵まれたサラリーマンであり、「退屈」とは死への時間が伸びた老後の退屈。

楯谷：「デイトリップパー」とは「僕」であり、月一で女の子に会いに行くデイトリップパー

僕は三十二で彼女は十八で……、と考えると、どうしてもうんざりしてしまうことになる。

123

僕はまだ三十二で、彼女はもう十八……これでいいのだ。

我々はちよつとした友だちであつて、それ以上でもないし、それ以下でもない。僕には妻がいて、彼女にはボーイ・フレンドが六人もいる。彼女はウィークデイに六人のボーイ・フレンドとデートをし、月に一度だけ日曜日に僕とデートをする。それ以外の日曜日には彼女は家でテレビを見る。テレビを見ている時の彼女はせいうちのように可愛い。

彼女が生まれたのは一九六三年で、その年にはケネディー大統領が撃ち殺された。そしてその年に僕ははじめで女の子をデートに誘った。流行っていた曲はクリフ・リチャードの「サマー・ホリデイ」だっけ？

まあそんなことはどうでもいい。

とにかくそんな年に彼女は生まれた。

そんな年に生まれた女の子とデートをすることになろうなんて、その頃にはもちろん思いもよらなかった。今だつてどうも不思議な気がする。月の裏側まで行つて煙草でもふかしているような気分だ。

若い女の子って退屈だよ、というのがまわりにいる人々のおおまかな統一見解である。話だつて合わない

124

いし、反応だつて月並みだしさ、と彼らは言う。にもかかわらず連中だつてよく若い女の子とデートをする。それでは彼らはやつと退屈ではない若い女の子を捜し出したのだろうか？ いや、そんなわけではない。要するに彼女たちの退屈さが彼らをひきつけるのである。彼らは退屈の水をバケツいっぱい頭から浴びながら、相手の女の子にはしづく一滴かけないというややっこしいゲームをごく純粹に楽しんでいるのである。

少なくとも僕にはそのように思える。

事実、若い女の子たちの十人中九人までは退屈な代物である。しかしもちろん、彼女たちはそんなことにぜんぜん気づいてはいない。彼女たちは若く、美しく、そして好奇心にみちている。退屈さなんて自分たちとは無縁の存在だと彼女たちは考えている。

やれやれ。

僕はなにも若い女の子たちを責めているわけではないし、また嫌っているわけでもない。それどころか、僕は彼女たちが好きだ。彼女たちは僕に、僕が退屈な青年であつた頃のことを思い出させてくれる。これはなんというか、とても素晴らしいことである。僕らだつてその昔はどうしようもなく、美しいくらい月並みで、退屈だつたのだ。

「ねえ、もう一度十八に戻りたいって思う？」と彼女が僕に訊ねる。

「いや」と僕は答える。「戻りたくなんかないな。たとえ

幾ら金を積まれても、もう一度十八になんかなりたくないね」

彼女は僕の答がうまく理解できないようだった。

「戻りたくないつて……本当に？」

「もちろん」

125

「どうして？」

「今のままでいいからさ」

彼女はテーブルに頬杖をついて考えこみ、考えこみながらコーヒー・カップの中でスプーンをかちやかちやとまわした。「そういうのつてなんか信じられないな」

「信じた方がいいよ」

「でも若い方が素敵じゃない」

「たぶんね」

「じゃあどうして今の方がいいの？」

「一度で十分だからさ」

「私はまだ十分じゃないな」

「だつて君はまだ十八だもの」

「ふうん」と彼女は言う。そして君はもう十八なんだから、と僕は自分に向かってそつと言ひ添える。

僕はウェイトレスをつかまえて二本めのビールを頼んだ。外は雨で、窓からは横浜港が見えた。

「ねえ、十八の頃つて何を考えてた？」

「女の子と寝ること」

「その他には？」

「それだけ」

彼女はクスクスと笑つてからコーヒーをひとくち飲んだ。

「で、うまくいった？」

「うまくいったのもあるし、うまくいかなかったこともある。もちろんうまくいかない方が多かつたけど」

126

「何人くらいの女の子と寝た？」

「数えてないよ」

「本当？」

「数えたくないんだ」

「私が男だつたらきつと数えちゃうな。だつて楽しいじゃない」

もう一度十八というのも悪くないな、と思える時だつてある。しかし十八に戻つてまず最初に何をしようかと考えてみると、僕にはもう何ひとつ思いつけないのだ。僕はもし十八に戻つたとしても、何をすればいいか思いつけないのだ。

あるいは僕はもう一度十八になって、三十二歳の魅力的な女性とデートをすることになるかもしれない。これなら悪くない。

「もう一度十八に戻りたいと思つたことはありませんか？」

と僕は彼女に訊ねる。

「そうねえ」と彼女はにつこり笑つて少し考えるふりをする。「ないわ。たぶんね」

「本当に？」

「うん」

「よくわからないな」と僕は言う。「若いというのは素晴

らしいことだってみんな言いますよ」

「そうよ、素晴らしいことよ」

「じゃあなぜ戻りたくないんですか？」

「あなたも年を取ればわかるわよ」**127**
でもやはり僕は三十二で、一週間もランニングをなまけるとおなかの肉が目立ってくるという状況に置かれている。もう十八には戻れない。これはあたりまえのことだ。

朝のランニングをすませると野菜ジュースを一缶飲み、椅子にごろんと横になり、ビートルズの「デイトリップパー」をかける。

「デー——イ・エイ・トリッパー」

あの曲を聴いていると、列車のシートに腰かけているような気分になる。電柱やら駅やらトンネルやら鉄橋やら牛やら馬やら煙突やらガラクタやらが、どんどん後に過ぎ去っていく。どこまでいったって、たいして変わりはええのしない景色だ。昔はずいぶん素敵に景色みたいに思えたものだけだな。

隣の席に座る相手だけが時折変わる。その時僕の隣りに座っていたのは十八の女の子だった。僕は窓際に、彼女は通路側に座っていた。

「席をかわってあげようか」と僕は言う。

「ありがとう」と彼女は言う。「親切なのね」

親切なわけじゃないんだ、と僕は苦笑する。君よりはずっと退屈さに慣れているというだけのことなんだよ。ただそれだけのことなんだ。

電柱を数えるのにも飽きた

三十二歳の

デイトリップパー。

128

これは作り損ねの俳句

1981／8／20

32歳のデイトリップ

村上春樹

126

僕は三十二で彼女は十八で……、と考えると、どうしてもうんざりしてしまうことになる。

僕はまだ三十二で、彼女はもう十八……これでいいのだ。

我々はちよつとした友だちであつて、それ以上でもないし、それ以下でもない。僕には妻がいて、彼女にはボーイ・フレンドが六人もいる。彼女はウィークデイに六人のボーイ・フレンドとデートをし、月に一度だけ日曜日に僕とデートをする。それ以外の日曜日には彼女は家でテレビを見る。テレビを見ている時の彼女はせいいうちのように可愛い。

彼女が生まれたのは一九六三年で、その年にはケネディー大統領が撃ち殺された。そしてその年に僕ははじめで女の子をデートに誘つた。流行つていた曲はクリフ・リチャードの「サマー・ホリデイ」だっけ？

まあそんなことはどうでもいい。

とにかくそんな年に彼女は生まれた。そんな年に生まれた女の子とデートをすることになろうなんて、その頃にはもちろん思いもよらなかつた。今だつてどうも不思議な気がする。月の裏側まで行つて煙草でもふかしているような気分だ。

若い女の子って退屈だよ、というのが我々の仲間まわりにいる人々のおおまかな統一見解である。話だつて合

わな 124 いし、反応だつて月並みだしさ、と彼らは言う。

にもかかわらず連中だつてよく若い女の子とデートをする。それでは彼らはやつと退屈ではない若い女の子を捜し出したのだろうか？ いや、そんなわけではない。要するに彼女たちの退屈さが彼らをひきつけるのである。彼らは退屈の水をバケツいっぱい頭から浴びながら、相手の女の子にはしづく一滴かけないというややっこしいゲームをごく純粹に楽しんでいるのである。

少なくとも僕にはそのように思える。

事実、若い女の子たちの十人中九人までは退屈な代物である。しかしもちろん、彼女たちはそんなことにぜんぜん気づいてはいない。彼女たちは若く、美しく、そして好奇心にみちている。退屈さなんて自分たちとは無縁の存在だと彼女たちは考えている。

やれやれ。

僕はなにも若い女の子たちを責めているわけではないし、また嫌っているわけでもない。それどころか、僕は彼女たちが好きだ。彼女たちは僕に、僕が退屈な青年であつた頃のことを思い出させてくれる。これはなんととうか、とても素晴らしいことである。僕らだつてその昔はどうしようもなく、美しいくらい月並みで、退屈だつたのだ。

「ねえ、もう一度十八に戻りたいって思う？」と彼女が僕に訊ねる。

「いや」と僕は答える。「戻りたくなんかないな。たとえ幾ら金を積まれても、もう一度十八になんかなりたくないね」

彼女は僕の答がうまく理解できないようだった。

「戻りたくないって……本当に？」

「もちろん」 125

「どうして？」

「今のままでいいからさ」

彼女はテーブルに頬杖をついて考えこみ、考えこみながらコーヒー・カップの中でスプーンをかちやかちやとまわした。「そういうのってなんか信じられないな」

「信じた方がいいよ」

「でも若い方が素敵じゃない」

「たぶんね」

「じゃあどうして今の方がいいの？」

「一度で十分だからさ」

「私はまだ十分じゃないな」

「だつて君はまだ十八だもの」

「ふうん」と彼女は言う。そして君はもう十八なんだから、と僕は自分に向かってそつと言ひ添える。

僕はウェイトレスをつかまえて二本めのビールを頼んだ。外は雨で、窓からは横浜港が見えた。

「ねえ、十八の頃って何を考えてた？」

「女の子と寝ること」

「その他には？」

「それだけ」

彼女はクスクスと笑つてからコーヒーをひとくち飲んだ。

「で、うまくいった？」

「うまくいったのもあるし、うまくいかなかつたこともある。もちろんうまくいかない方が多かつたけど」 126

「何人くらい女の子と寝た？」

「数えてないよ」

「本当？」

「数えたくないんだ」

「私が男だつたらきつと数えちゃうな。だつて楽しいじゃない」

もう一度十八というのも悪くないな、と思える時だつてある。しかし十八に戻つてまず最初に何をしようかと考えてみると、僕にはもう何ひとつ思いつけないのだ。僕はもし十八に戻つたとしても、何をすればいいか思いつけないのだ。

あるいは僕はもう一度十八になって、三十二歳の魅力的な女性とデートをすることになるかもしれない。これなら悪くない。

「もう一度十八に戻りたいと思つたことはありませんか？」と僕は彼女に訊ねる。

「そうねえ」と彼女はにつこり笑つて少し考えるふりをする。「ないわ。たぶんね」

「本当に？」

「うん」

「よくわからないな」と僕は言う。「若いというのは素晴らしいことだってみんな言いますよ」

「そうよ、素晴らしいことよ」

「じゃあなぜ戻りたくないんですか？」

「あなたも年を取ればわかるわよ」**127**
でもやはり僕は三十二で、一週間もランニングをなまけるとおなかの肉が目立ってくるという状況に置かれている。もう十八には戻れない。これはあたりまえのことだ。

朝のランニングをすませると野菜ジュースを一缶飲み、椅子にごろんと横になり、ビートルズの「デイトリップパー」をかける。

「デー——イ・エイ・トリップパー」

あの曲を聴いていると、列車のシートに腰かけているような気分になる。電柱やら駅やらトンネルやら鉄橋やら牛やら馬やら煙突やらガラクタやらが、どんどん後に過ぎ去っていく。どこまでいったって、たいして変わりはばえのしない景色だ。昔はずいぶん素敵な景色みたいに思えたものだけれどな。

隣の席に座る相手だけが時折変わる。その時僕の隣りに座っていたのは十八の女の子だった。僕は窓際に、彼女は通路側に座っていた。

「席をかわってあげようか」と僕は言う。

「ありがとう」と彼女は言う。「親切なのね」

親切なわけじゃないんだ、と僕は苦笑する。君よりはずっと退屈さに慣れているというだけのことなんだよ。
ただそれだけのことなんだ。

電柱を数えるのにも飽きた

三十二歳の

デイトリップパー。

128

これは作り損ねの俳句

32歳のデイトリップー

村上春樹

133

僕は三十二で彼女は十八で……、と考えると、どうしてもうざりしてしまう。

僕はまだ三十二で、彼女はもう十八……これでいいのだ。

我々はちよつとした友だちであつて、それ以上でもないし、それ以下でもない。僕には妻がいて、彼女にはボーイ・フレンドが六人もいる。彼女はウィークデイに六人のボーイ・フレンドとデートをし、月に一度だけ日曜日に僕とデートをする。それ以外の日曜日には彼女は家でテレビを見る。テレビを見ている時の彼女はせうちのように可愛い。

彼女が生まれたのは一九六三年で、その年にはケネディー大統領が撃ち殺された。そして僕ははじめて女の子をデートに誘つた。流行っていた曲はクリフ・リチャードの「サマー・ホリデイ」だっけ？

まあどうでもいい。

とにかくそんな年に彼女は生まれた。

そんな年に生まれた女の子とデートをすることになろうなんて、その頃には**134**もちろん思ひもよらなかつた。今だつてどうも不思議な気がする。月の裏側までいって煙草をふかしているような気分だ。

若い女の子って退屈だよ、というのが我々の仲間の統一見解である。にもかかわらず連中だつてよく若い女の子とデートをする。それでは彼らはやつと退屈ではない若い女の子を捜し出したのだろうか？ いや、そんなわけではない。要するに彼女たちの退屈さが彼らをひきつけるのである。彼らは退屈の水をバケツいっぱい頭から浴びながら、相手の女の子にはしづく一滴かけないというやつっこしいゲームをごく純粋に楽しんでいるのである。

少なくとも僕にはそのように思える。

事実、若い女の子たちの十人中九人までは退屈な代物である。しかしもちろん、彼女たちはそんなことに気づいてはいない。彼女たちは若く、美しく、そして好奇心にみちている。退屈さなんて自分たちとは無縁の存在だと彼女たちは考えている。

やれやれ。

僕はなにも若い女の子たちを責めているわけではないし、また嫌っているわけでもない。それどころか、僕は彼女たちが好きだ。彼女たちは僕に、僕が退屈な青年であつた頃のことを思い出させてくれる。これはなんといいか、とて**135**も素晴らしきことである。

「ねえ、もう一度十八に戻りたいって思う？」と彼女が僕に訊ねる。

「いや」と僕は答える。「戻りたくないかないな」

彼女は僕の答がうまく理解できないようだった。

「戻りたくないって……本当に？」

「もちろん」

「どうして？」

「今のままでいいからさ」

彼女はテーブルに頬杖をついて考えこみ、考えこみながらコーヒー・カップの中でスプーンをかちやかちやとまわした。「信じられないな」

「信じた方がいいよ」

「でも若い方が素敵じゃない」

「たぶんね」

「じゃあどうして今の方がいいの？」

「一度で十分だからさ」

「私はまだ十分じゃないな」**136**

「だつて君はまだ十八だもの」

「ふうん」

僕はウエイトレスをつかまえて二本めのビールを頼んだ。外は雨で、窓からは横浜港が見えた。

「ねえ、十八の頃って何を考えてた？」

「女の子と寝ること」

「その他には？」

「それだけ」

彼女はクスクスと笑つてからコーヒーをひとくち飲んだ。

「で、うまくいった？」

「うまくいったのもあるし、うまくいかなかったこともある。もちろんうまくいかない方が多かつたけどさ」

「何人くらいの女の子と寝た？」

「数えてないよ」

「本当？」

「数えたくないんだ」

「私が男だつたらきつと数えちゃうな。だつて楽しいじゃない」**138**

もう一度十八というのも悪くないな、と思える時だつてある。しかし十八に戻つてまず最初に何をしようかと考えてみると、僕にはもう何ひとつ思いつけないのだ。

あるいは僕は三十二歳の魅力的な女性とデートをすることになるかもしれない。これなら悪くない。

「もう一度十八に戻りたいと思つたことはありますか？」

と僕は彼女に訊ねる。

「そうねえ」と彼女はにっこり笑つて少し考えるふりをする。「ないわ。たぶんね」

「本当に？」

「うん」

「よくわからないな」と僕は言う。「若いというのは素晴らしいことだつてみんな言いますよ」

「そうよ、素晴らしいことよ」

「じゃあなぜ戻りたくないんですか？」

「あなたも年を取ればわかるわよ」**139**

でもやはり僕は三十二で、一週間もランニングをなまけるとおなかの肉が目立ってくるという状況に置かれていた。もう十八には戻れない。これはあたりまえのことだ。

朝のランニングをすませると野菜ジュースを一缶飲み、

椅子にごろんと横になり、ビートルズの「デイトリップパー」をかける。

「デー——イ・エイ・トリップパー」

あの曲を聴いていると、列車のシートに腰かけているような気分になる。電柱やら駅やらトンネルやら鉄橋やら牛やら馬やら煙突やらガラクタやらが、どんどん後に過ぎさっていく。どこまでいったって、たいして変わりはええのしない景色だ。昔はずいぶん素敵な景色みたいに思えたものだけだな。

隣の席に座る相手だけが時折変わる。その時僕の隣りに座っていたのは十八の女の子だった。僕は窓際に、彼女は通路側に座っていた。

「席をかわってあげようか」と僕は言う。

「ありがとう」と彼女は言う。「親切なのね」

親切なわけじゃないんだ、と僕は苦笑する。君よりはずっと退屈さに慣れているというだけのことなんだよ。

140

電柱を数えるのにも飽きた

三十二歳の

デイトリップパー。